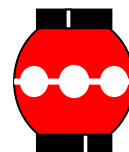


“祇園さん”と通称される八坂神社周辺の地は、平安時代から花見や月見の客を相手の茶店や水茶屋が生まれました。戦国時代後に、“茶汲女”や“茶点女”という女性が客をもてなし始めます。後にお茶が酒になり、田楽を食べさせ、歌を聞かし、舞を見せるようになり、これが祇園芸妓の始まりで、“お茶屋”の名称の由来です。寛文5（1665）には、初の茶屋渡世（政府公認の営業許可）が出ており、文政期（1800年頃）には、お茶屋700軒、芸舞妓3,000名を誇りました。

毎年11月8日、歌人・吉井勇を偲ぶ“かにかくに祭”が、祇園新橋白川畔の歌碑の前で、祇園の芸舞妓らが出て、華やかに行われます。祇園を有名にし、戦後25年から「都をどり」の歌詞もつくってきた吉井に対する感謝の宴です。吉井は伯爵吉井幸蔵の二男として、明治19年に東京で生まれました。中学生の頃、与謝野晶子の「みだれ髪」の“清水へ 祇園をよぎる桜月夜こよい逢ふ人 みなうつくしき”を読んで以来、氏にとって祇園は夢幻の恍惚境となつたらしい。

かにかくに 祇園は恋し 寝るときも 枕の下を 水の流るる (吉井勇)

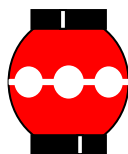
男「オユキサン、ワタシノオヨメサンニ ナツテクダサイ。」
 女「旦那はんに別れる話しをしてきましたが、それにはお金がいます。」
 男「オオ、オカネ、マネー、ヨロシイ、イクライリマス？」
 女「はい、四・・・四万円。」



言い繕うための無茶な金額だった。現在のお金で数億円であろうか。当時、南座を松竹が買取する話があり、暗礁に乗り上げた末に、「お雪さんの値段で」と松竹が切り出したくらいである。

男「四マンエン？ ソレカンガエマシヨウ。」

男は顔色一つ変えなかった。男の名はジョージ・デニソン・モルガン、アメリカの大財閥ジョージ・ピアモント・モルガンの甥である。彼は、祇園の尾花亭で一目お雪を見たときから、恋のとりこになった。そして、何度も彼女を訪ねては、当世一の胡弓を聞いた。噂が噂を呼び、新聞もトップ記事で「四万円芸妓・モルガンお雪」と書きたてた。時は明治35年の夏。お雪20歳。



お雪「俊さん、うちどないしたらええんどすやろ。」
 お雪「ねえ、俊さん、モルガンのとこへいくのやめろというて。」
 俊介「僕はたかがしれた貧乏学士だ。それよりもモルガン財閥の奥さんの方が・・・」
 俊介「僕にも親兄弟がある。君にも親兄弟がある。その人たちを泣かせては・・・」
 お雪「きらい、俊さんきらい。」

お雪は、暗い南禅寺の築地塀の道を泣きながら駆け去った。

祇園の芸妓たちは、新設されたばかりの帝国大学の学生を大切に「花代」を自分で達引いても尽くした。親しくなると、おけいこの合間を見て、昼間その下宿に遊びに行き、掃除、洗濯をしたり、卓上ランプの傘の掃除をしたりする者も多くいた。お雪と俊介もそうした仲であった。お雪は初々しく新妻のように俊介にかしづいた。小さい胸に「私のお星さま」と秘めた恋だった。

モルガンもお雪にも自殺未遂騒ぎが起きるなど紆余曲折の末、4年後に二人は国際結婚した。アメリカの社交界では受入れられたとはいえ、やがてフランスへ渡り順調な生活を取り戻す。が、二人の幸福は長くはなく、第一次大戦のさなか、モルガンはスペインでお雪を残し病没する。

お雪はフランス社交界の花形であったが、爾来、モルガンの面影を抱き南仏で静かに暮らした。日華事変たけなわの昭和13年、なつかしい京都に帰り、北区紫野にてひっそりと余生を送る。同38年5月18日、急性肺炎で病没、享年82歳、霊名はテレジア。お墓は東山区東福寺塔頭同聚院。フランスから贈られた「白バラ・ユキサン」がその前に植えられ、面影を偲ばせている。

まことに時代がかっているが実話である。他にも幕末の勤皇志士を命懸けで守り抜いた気丈な女もいた。政治家、俳優、作家などの著名人と芸舞妓とのエピソードやロマンスは数知れない。

遊びの場では聖俗や貧富などは一切関係無い。遊ぶときは、みんな子供という考え方が、祇園独特の“しきたり”の基調にある。遊びだからこそ細部の“しきたり”にこだわり、遊びが完成される。そして、それらの極め付きともいえるのが、格調のある京舞・井上流の舞であろう。

井上八千代、祇園の芸舞妓に舞を教える井上流の師匠の名前です。毎年正月前後のTVニュースで、芸舞妓が師匠宅で挨拶している場面をご覧ください。現在の三千子で5代目ですが、200年間、女性により継承されています。3世より能の**観世流片山家**と姻戚関係を結びました。

初代：本名井上サト。1767-1854。京都出身。五撰家の一つ**近衛家**に奉仕（嫁入り修行？）。

教育係りの老女・**南大路鶴江**から舞をはじめ芸事諸般を徹底的に指導される。周囲からの覚えめでたく、長い奉公明けの際『よう仕えた。椿のごとく永く恩を忘れぬ。感謝の印に井菱の紋を授ける。』と近衛家から言葉を受けて、井上流を始める。井上流が流儀の紋に**井菱**を、流儀の花に**椿**を用いるのは、この故事による。

2世：本名井上アヤ。1790-1868。サトの兄の娘。金剛流の能の型を取り入れ、舞の型を完成する。娘のさとは、春子との間で3世襲名を争う。

3世：本名片山春子。1838-1939。101歳の長寿を全うする。大阪・住吉神社社家の娘。祇園の舞を井上流で確立させる。（それ以前は篠塚流）**「都をどり」**の始まりとなる。

4世：本名片山愛子。1905-。内弟子から春子の子・博通の妻となる。平成2年秋に文化勲章授与。井上八千代姓を三千子に譲ってからは、井上愛子を名乗る。

5世：本名片山三千子。確か44歳のはず。愛子の孫。昨年5月に5世を襲名し、**本年11月に襲名披露公演**を行う。私的に**「滯の会」**（4, 6, 9, 12月）も主宰。

私事ですが、本公演を17日に観る予定です。GRAYに負けない評判です。

京の五花街（**祇園甲部**、**祇園東**、**先斗町**、**宮川町**、**上七軒**）は、春季に舞の披露をします。花街の順に挙げると、都をどり、祇園をどり、鴨川をどり、京おどり、北野をどり、です。井上流の都をどりは、明治5年（1872）、復興目的の京都博覧会第二回の余興で花街のをどりを挙行したことがきっかけです。**植村正直**（京都府大参事、後の知事）と**杉浦治郎右衛門**（この名は世襲です。万亭の亭主、現・一力茶屋。）と3世春子が相談し、命名しました。当初、植村と杉浦両氏は「雅をどり」という名前を提案したが、春子が「みやび」の「び」の語感が良くないと言い、それで「都をどり」に落ち着いた経緯があります。また、せっかく提案された「みやび」の名前は、これまた春子の希望で、井上流の会の名前（**みやび会**）として継承されています。

それにしてもこの3世春子という方は、ものすごいエネルギーの持ち主です。101歳の天寿もさることながら、上述の交渉ごと（この時同時に篠塚流を追い遣っています）であるとか、駆け落ち同然で晋三と結婚したり、舞いの師匠役をこの後に二度も辞職したりなど、激しい気性なのでしょうね。しかし一方では、4人の子のうち3名までを早くに失ってもおり、生き甲斐である舞いに没頭し、微塵も妥協しないという姿勢に現れたのかと、悲しい業のようなものを覚えます。

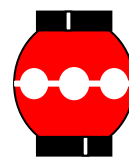
4世愛子のエピソードも紹介しましょう。舞の稽古はマニュアルというものがありませんので、師匠の模範演技を目で見て覚えるしかないのです。足の運び方、手指の動き、目の遣りようなどそれも大変です。どうしても上手くいかない師匠から声が掛かります。『あんた、覚えが悪うおますな、もう**おとめ**です。』と。“おとめ”とは「お止め」とも書き、稽古中止を意味します。これは当日の稽古が中止になるという生やさしいものではなくて、そんなに覚えが悪いのなら、もう芸舞妓を辞めてしまいなさい、という最後通牒なのです。言葉は穏やかなようですが、死の宣告です。たいていの弟子はヨヨと泣き崩れ、立ち上がることもできません。結局どうなるかと言えば、姉弟子のとりなしで後日師匠宅にお詫びに出掛け、お許しをいただいて、再チャレンジ!!です。ですから、再チャレンジの稽古は鬼気迫るものとなります。怖いことが分かっているのに、そのまま逃避してしまう弟子もいます。4世でも、“おとめ”を経験していますよ。

4世が平成2年に文化勲章を受けられた際のお祝いの会にて、弟子連中が余興で替え歌を披露しました。原曲は森昌子の『先生』で、その替え歌の歌詞は次のようなものでした。

♪♪ 初めて「おとめ」にあった日は 雨がしとしと降っていた 傘にかくれて 辰巳橋
ひとり見つめて泣いていた 幼いわたしが胸いため おこられつづけた人の名は
おっしょうさん（＝お師匠さん） おっしょうさん それは おっしょうさん ♪♪

聞いていた師匠は涙を流して喜んだとのことでした。

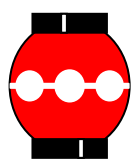
ところで、祇園では「芸者」ではなく「^{げいこ}芸妓」と呼びますし、「踊り」ではなく「**舞い**」と呼びます。「舞」は上方（関西）に興った能楽の系統といわれ、江戸に発生した歌舞伎の系統である「踊」とは区別されています。ちなみに、「舞」の流派には**井上流**、^{うめもと}榎茂都流、山村流、吉村流などがあり、片や「踊」には花柳、藤間、尾上、西川、若柳、坂東などの各流派があります。芸能人にも多い名前ですね。



続けて余談になりますが、夏季の鴨川畔とか貴船の「**川床料理**」って有名ですよ。あの読み方をご存知でしょうか？ 正解は、鴨川の方は「**カワユカ**料理」と読み、貴船の方は「**カワドコ**料理」と読みます。私は両方とも「カワユカ」だと思っていたのですが、或る方に教えてもらいました。舞妓はんを侍らせたりしたら、さぞかし気分が良さそうです。『ヒロさんのいけず。』とか何とか言われてみたいものです。そうした祇園の雰囲気といえば、故・山村美紗（推理小説家）の作品で『**京舞妓殺人事件**』。舞妓さんの生活ぶりが随所に見受けられ、謎解き以上に楽しめますよ。

先に述べたお茶屋さんの経営も楽ではありませんで、五花街でも廃業が相次いでいます。現在のところ合計で179軒営業していますが、特に**上七軒**（北野天満宮付近）では10軒と最小です。お茶屋の**女将さんの高齢化問題**が課題として、誰かに相続したいのですが、「**風俗営業適正化法**」に基づく条例が厚い壁となります。何故なら、経営者の死去による相続以外は新規申請が必要となり、このとき学校や病院などに近接するお茶屋は京都府条例により営業が許可されないのです。上七軒は第二種地域として祇園より厳しく、近接70m以内の地域が対象となります。現実には新規営業を禁止しているも同然です。ごく最近も3軒のお茶屋が、廃業の憂き目に遭いました。

祇園甲部のお茶屋・孝子の女将（昭和40年代、11PMという番組でホステス役をしていた**安藤孝子**さんです。）の話聞く機会がありましたが、店構えは残っていても、実際に経営しているところは少なくなり、**祇園甲部**でも十数軒ではないかと言われてました。



そんな中で明るい話題として、新しい舞妓はんが宮川町で7名、上七軒で3名、誕生しました。花街のお茶屋や舞妓がホームページを開設してPRしたり、修学旅行生に舞の披露をするなど、懸命に新規開拓を行った賜物ですね。「きれいなおべべ（着物）を着てみたい」とか、「伝統文化に触れて生活してみたい」など、動機は様々です。現在では、五花街合計で約250名の芸舞妓がおられるようです。

最後に、祇園の花かんざし（花簪）と一年間の行事をご紹介します。花簪は毎月変わり、一月・松竹梅、二月・梅、三月・なたね、四月・桜、五月・あやめ、六月・柳、七月・うちわ、八月・すすき花火 or 朝顔、九月・桔梗、十月・菊 or 小菊、十一月・紅葉、十二月・まねき、と季節感にあふれています。また、しきたり通りの年中行事も多く、下記のようになっています。

- 一月 7日・始業式：祇園甲部歌舞練場にて「祇園の芸舞妓の誓い」斉唱。
13日・初寄り：**正装**で井上八千代師匠宅を訪問・挨拶。
- 二月 2～3日・節分祭：八坂神社と日向神社で豆まきをする。
- 三月 20日・大石忌：一力亭にて八千代が「深き心」を、芸舞妓が「宿の栄」を舞う。
- 四月 1～30日・**都をどり**：祇園甲部歌舞練場にて開演。他花街も五月までに開演。
- 五～六月 特定の行事なし。
- 七月 初旬・**みやび会**：八坂神社に参詣。
1～29日・祇園祭：宴多数、出番多し。「無言詣」の慣習。
- 八月 1日（^{はっさく}八朔）：**正装**でお茶屋や芸の師匠宅を訪問・挨拶。
- 九月 特定の行事なし。
- 十月 1～6日・温習会：京舞の披露。
- 十一月 8日・**かにかくに祭**：吉井勇を偲び、お茶屋・大友跡にて菊の献花。
- 十二月 初旬・顔見世総見：南座公演4日目に芸舞妓が勢揃い。
13日・**おことうさん**：事始め（＝迎春）。**八千代師匠**宅やお茶屋を訪問・挨拶。
↳「お事多うさんですね」＝何かと用事が多いですね、の意。

師匠の有名な言葉
「来年も
おきばりやっしゃ」